



鎮守の森だより

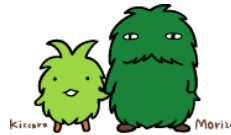
NPO 法人 社叢学会ニュース

第 11 号

2004年9月10日

社叢学会は 2005 年  に出展します！

会場内で 2,000 m²の森づくりなど 4 事業



本学会では、名古屋東部丘陵(長久手町・豊田市、瀬戸市)で開催される 2005 年日本国際博覧会(愛知万博・愛・地球博:3月25日~9月25日)に屋外出展を中心とした出展をいたします。出展のテーマは「森に生きる日本文化」で、8月末には出展の主体となる NPO 法人社叢学会 愛・地球博出展実行委員会(委員長=園田稔副理事長)も開催され、来年3月の開幕に向けて本格的な準備作業に入りました。

まず屋外出展は、長久手会場北ゲート付近に約 2,000 m²の用地を確保、常緑中心の森を再現します。ここは、博覧会終了後も、記念公園の一画として保存されます。さらに万国博覧会協会の要請を受けて、愛・地球博シンボルパビリオンである「グローバル・ハウス」前に設置される巨大な緑化壁「バイオ・ラング(緑の都市浄化装置)」の2本のシンボル・タワー(高さ25m)頂上部に「天空鎮守の森」を造成します。

このほか映像展示として、森に育まれた日本の伝統文化・芸能を紹介するハイビジョン映像作品「日本は森の国」シリーズ6本(各10分;総集編、籠もりく大和の風土、まつりの風土、神の木・神の森、森をつくる話、森の四季)を制作し、「千年の森」の一画に設置する東屋で上映するほか、ほかのパビリオンなどに提供し、活用を働きかけます。

さらに、万博期間中の六月上旬に、伊勢神宮の式

年遷宮事業の始まりを告げる「神宮の御杣山神事」が木曾の国有林で行われ、NHKがハイビジョン映像を収録することから、これを会場内の大スクリーンに実況中継し、あわせて日本の「森の文化」を代表する遷宮事業の映像記録の主要部分を上映することも計画しております。また、これにあわせて長久手会場の中央広場などで各地の山車や神輿など祭礼芸能を集めた「森のまつり」を演出することも検討しています。

また、出展を記念して、「森の文明」をテーマに国際学術シンポジウムを開催します。森と水と生命の根源を現代社会に伝える文明装置として、「鎮守の森」に象徴される社寺林など、特に都市空間における意義をめぐって、海外の学者たちを交えた学際的な論究をすすめ、国際的な評価を試みます。こうした事業にかかる予算は約 8,000 万円が見込まれており、全国有力大社、関係企業を中心にご協賛をお願いいたしております。

今後、会員の皆さま方には、会報や当学会ホームページ(<http://www2.odn.ne.jp/shasou/>)などを通じて、準備の進行状況のご報告や会場見学会のご案内、またご寄附のお願いや、会場管理等のボランティア募集をしておりますので、ご理解、ご協力をいただきますようお願いいたします。

木を植える文化 日本の林業・ヨーロッパの林業-

講師 川村 誠
(京都大学大学院 森林・林業政策学分野 助教授)

日本人の森との関係 大津市と信楽町の間には田上山という森が荒廃した山がある。なぜこのような森になったかといえば、ここには飛鳥時代から奈良時代にかけて、社寺仏閣建築の用材に適したヒノキ林があった。元来、花崗岩質の乾燥土壌で、スギよりヒノキに適した山であった。かなり大量のヒノキがあったと考えられる。伐採したあとはアカマツが入り、しかも土壌が流れてこのような山になった。これはヒノキを伐り尽くした結果で、地中海沿岸や中国の黄土高原などの森林利用方法と同じである。

当時の人は、伐り尽くした森に新たに木を植えることなく、植えずに木を使う方法を考えた。その具体例として、京都北部の美山町にある京都大学の研究林(芦生演習林)を見てみると、そこはスギの天然生林である。天然生林とは、林木の伐採は行わぬ人工造林などを行わない天然の森林のことで、自然に落下した種子から発生した稚樹または根株から萌芽したひこばえを以って行う造林法を天然更新という。この造林法は、大正の初めごろまで地元の人たちによって行われてきた。

組積工法と軸組工法 美山町の藁葺民家とバルト海沿岸のエストニアの野外博物館に保存されている藁葺民家を見比べると、屋根の葺き方などが非常によく似ている。しかし、よく見ると形は似ているが、エストニアの民家の壁の構造はログハウス方式である。即ち、丸太を横に積んで構築する組積工法である。日本の藁葺民家は、内部から壁を見ると、柱によって組み立てられた軸組工法である。

<日本の住宅> 「洛中洛外図」に描かれた町屋をみると、第1の特徴は柱である。いわゆる軸組工法で、しかも丸太を使用せず製材した角材である。町屋は江戸時代になると、非常に洗練され複雑化してくる。現在、岡山県大原町に建築中の木造住宅においては、2階建てではあるが、12cm角で3mの柱と6mの通し柱を210本も使用している。柱だけでなく桁や梁、それに付随する木材が必要になってくる。これらの木材はどこから持ってくるのか？

この傾向が日本の木材産業のあり方を決定づけた大きな背景になっている。

<ヨーロッパの住宅> ルーマニア北部のマラムレシュ地方には多くの木造家屋が残っていて、屋根は日本と同じ手法の柿葺であるが、家の構造は木を横に積んで壁を造るログハウス方式(組積工法)である。最近、モンゴルにおいてゲルから木造住宅に移行しつつあるが、その構造はログハウス方式である。ハーフティンバーと呼ばれる木骨建築はヨーロッパで広く行われているが、北欧からロシアにかけてログハウス用の丸太木材が豊富に手に入るところでは、ハーフティンバーの住宅はない。ハーフティンバーは見た目には柱であるが、実際は柱に力がかかっておらず、現在はデザインとして残っているだけである。つまり壁部分は木のボックスを積み上げて強度を保っている。イギリスにおける伝統的なハーフティンバーは軸の空間または外部をレンガ積にしている。

育てる林業・植える林業 ヨーロッパにおける林業の基本的な作業は森林を育てながら伐採する。つまり、必ず種子になる木を残し、その種子が落ちて次の世代が育ってから、その木を伐る。いわゆる更新という方法に特徴がある。現在は、苗畑で苗木を育てて森林の空いた部分に植えるが、基本的には母親の木から種子を落として、それを育てるという考え方である。ヨーロッパの森林はどこへ行っても、日本のようにスギやヒノキを林立させて植え込んでいくことはほとんどない。日本の林業の特徴は苗木の一斉植栽で、これを「田植型」育林方法とよんでいる。いわゆる水田に稲を植えるのと同じ発想だと考えられる。畑に1年物、2年物といった具合に苗木を育ててゆき、それを地ごしらえした山に一斉に植える。このように一斉に植えて、同じ形の木材を一斉に伐採するやりかたは、まさに稲作と同じである。日本建築には、このような丸太が欲しかったのである。

次回予告(第12回関西定例研究会)

日時：2004年9月18日(土) 13:30~15:30
場所：伏見稲荷大社儀式殿 (京都市伏見区稲荷 075-461-7331)
テーマ：武士と神社
講師：元木 泰雄(京都大学大学院人間・環境学研究科教授)
コメンター：野口 実(京都女子大学宗教・文化研究所教授)

社叢を守る意義を考える～多様な視点からのアプローチ～

講師 岡村 穰（名古屋市立大学芸術工学部教授）

飯田 清春（真清田神社宮司）

コメンター 林 進（岐阜大学名誉教授）

社叢と土壌調査

日本の自然について考えると、都市の中にはほとんど自然がなく、都市と離れたところには自然がある。自然はあるのだが、自然がないといった変な状況になっている。

山は維持管理する後継者が減って荒れ、都市は人工的なもので埋め尽くされている。都市の中に、いかに自然と緑を持ち込むのか、そのあたりが重要な視点になってくる。今ひとつは、山との交流。水害に対しての川の上流部と下流部の交流など、今までバランスよく保たれていた都市と自然の関係が急速に失われてゆく。これをどうしたら回復できるのか。

社叢の保存、神域の問題、宗教の問題など、われわれ日本人が戦後に忘れてきた原点みたいなところと関連づけながら、自然の復興を考えていかなければならない。

かつて木曽川流域の土壌調査をした際、流域沿いのいくつかの神社の森を調査した。畑や水田は人工的に変化し、時代によって地形や土壌も変化している場合が多い。これに対し、神社の森は昔ながらの地形と土壌をとどめているので、比較研究上、非常にありがたい。こういった面からも社叢を守る必要性を感じる。

立田村の富岡神社の鎮座する地域は、すべて砂まじりの土壌で、神社造営に際しても、他から土を運ぶことなく、元来の土の上に建造されたことが判った。また、海津町の治水神社は、揖斐川と長良川の流れを堰止めるために創建された神社で、ここにある松林の土壌を調べると、表面から25cmあたりで土の層が変わる。その下は砂の層になっている。これは松を植えるために、他から大量の土を搬入し、土壌を作り松を育てたことが判る。当初は50cm位の表土層だったと思われる。

社寺の森に対し、行政は都市の緑化事業の際、緑としてカウントしておらず、これは大きな問題である。

尾張の神々と風土

尾張平野は東方の犬山市に鎮座する大縣神社の尾張本宮の山を中心に広がりを見せている。肥沃な三川（木曾川・揖斐川・長良川）の恵みで、昔から豊かな土地であったといえる。全国の神社仏閣の宗教法人数を見ると、京都が1番のように思えるが、一番多いのが愛知県である。ちなみに京都府は第10位となっている。

神社活動は非生産的なひとつの活動であるから、そこに住んでいる住民が豊かでないとその活動を維持できない。同時に、この尾張平野では、江戸時代に到るまで天災や旱魃による農民一揆は一度も起きていない。戦国時代にあれほど混乱していた日本を統一した信長や秀吉、さらには家康があれほどの軍隊をかかえておれたのは、かかえられていた兵隊が豊かであったからだといえる。

尾張における式内社を見ると、当時『延喜式』に記された2861社の内、尾張は121社で、そのうち、8社が大社号を与えられている。その後の官社には34社、うち3社が大社号を与えられている。現在、愛知県には3317社が鎮座している。

神社にとって、自然とのつながりは、神そのものとのつながりを意味し、神社の森そのものが神だという捉え方をしている。森や林の木を伐り倒すということは、そこに生息する微生物や虫、鳥、動物への影響も強く、まさに自然破壊へとつながる。神社において、建物を立てる時は、生命サイクルを破壊することなく、最小限の破壊をおことわりして地鎮祭を行う。また、枯れ木を伐るにも伐木祭というお祭をしてから伐っている。

次回予告(第12回関東定例研究会)

日時：2004年10月30日(土)
13:30～15:30

場所：國學院大学・渋谷キャンパス
(渋谷区東4-10-28)

！今回から会場が変わります。ご注意ください

テーマ：青垣の山

講師：千代 和芳（松緑神道大和山）

次回予告(第2回中部定例研究会)

日時：2004年10月23日(土)
13:30～15:30

場所：大縣神社参集殿（犬山市宮山3）

テーマ：

「湖北地方の条理制と鎮守の森」(仮題)

土屋敦夫（滋賀県立大学教授）

「犬山市の巨樹・古木」

本山啓子(犬山市エコアップリーダー)



京都大学で 森と木をテーマに公開講座

京都大学農学部森林科学専攻では公開講座「森と木から見える世界」(実行委員長: 森本幸裕同教授・社叢学会理事)を10月16日(土)・17日(日)に同大学農学部総合館 W324 講義室で開催します。

木や森に関する講義や2日目の午後には世界遺産に登録されている下鴨神社の森での樹木ウォッチング、木材ウォッチングなどの楽しい実習コースも準備されています。

定員は80名(先着順)で、受講料6,200円、お申込方法は、氏名(ふりがな)、郵便番号、住所、電話番号、返信先、希望する体験実習コース(1か2)を書いて、以下の方法により公開講座係までお申し込みください。折り返し、受講料振込の方法をお知らせします。締切りは、9月24日(金)です。

- ・ Eメール: 返信を希望するメールアドレスを明記し、forest-kokai@kais.kyoto-u.ac.jp まで
- ・ ファックス: 返信を希望するファックス番号を明記し、075-753-6300 まで
- ・ 往復はがき: 返信を希望する住所、宛名を返信用はがきに明記し、下記まで

〒606-8502 京都市左京区北白川追分町

京都大学農学部森林科学専攻 公開講座係

問い合わせ先: 森林科学専攻公開講座係

075-753-6230 Fax075-753-6300

E-Mail forest-kokai@kais.kyoto-u.ac.jp

詳しくはホームページをご覧ください。

<http://www.forest-kokai.kais.kyoto-u.ac.jp/>

事務局から

前号(第10号)でお知らせいたしました中部地区における第1回の定例研究会が、8月28日に尾張一宮市の真清田神社で開催され

名古屋市をはじめ周辺都市から多数の方が参加され、質疑応答などが活発に交わされ、大いに盛り上がった研究会でした。なお、前号で同研究会の予定日程を記しましたが、10月の日程が変更になっていますのでご注意ください(中面参照)。

会費の未納の方が多数おられます。会費のみで活動している当学会といたしましては、活動に支障をきたしますので、何卒よろしくお願いたします

編集後記

台風は来るわ、地震はあるわ、なにやら不穏な秋の始まり... 風で揺れているのやら、地面が揺れているのやら、はたまた車の振動で揺れているのやら。1回は朝の3時頃にちょっと大きめ。で翌朝、出勤すると中部定例研究会のテーブル起しにひいひい言ってるI事務局長が「ゆうべはね、あの地震の時、まだこれやったのよ」だって。力? 苦心? 作です。心して読んでやってくださいね~。

で、夏休みに入る前にはゼットタイHPを立ち上げるぞ!! との固い決意(といってもナンジャクなんですけどね)のもと、クソ暑い中をぱたぱたとPCを叩き何とか完成(といっても、ほとんどが工事中! なんです...)! 事務局にアドレスをお教えいただいている方にURLアドレスを配信してほっと一息。と思ったらY理事からお返事メール。「社葬やら車窓やら日本語は難しい...」。ん? 意味不明... ひょっとして検索したのかなあ。でも、送ったアドレスをクリックしてくれればいいのになあ... かと思えばI事務局長も試運転中に「あのアドレスでだめだったよ」だって。え、何か不都合が! とちょっとどきどき。「アドレス、これでしょ」。おいおい、ちがってるよお、それ。ま、おふたりともPCデビューしたてだからしょうがないか...。

ともあれ、中部で定例研究会も始まったし、HPもできたし、社叢学会も前途洋々だなぁってか!

(夏休みボケ 藤岡 郁)

発行人 社叢学会事務局 〒604-8115 京都市中京区蛸薬師通堺町通西入雁金町 373 番地
みよいビル 303 号 TEL075-212-2973 FAX075-212-2916
<http://www2.odn.ne.jp/shasou/> E-Mail shasou@ams.odn.ne.jp

社叢学会関東支部 〒171-0021 豊島区西池袋 2-36-1 ソフトタウン池袋 1101
TEL03-5950-6507 FAX03-5950-5184 E-Mail shasou@macrovision.co.jp